第31回　烏丸御池の東南の地域

今回は、表題を「烏丸御池の東南の地域」としましたが、第29回の東の地域で、北は御池通、南は六角通、西は烏丸通、東は高倉通で囲まれた一画です。烏丸御池は地下鉄の烏丸線と東西線の交わる乗り換え駅です。いわば、京都の中心ともいえるところです。

残念ながら、この地域には、仁丹の町名看板は発見できませんでした。他のスポンサーの町名看板は、劣化が激しいものもありましたが、町名看板の所在（案内図）に示したように、説明上必要なのでとりあげました。

■　姉小路通沿いの老舗

■　干菓子・半生菓子の亀末廣

烏丸通の一つ東の通りは、車屋町通で、南下すると姉小路通に突き当たって、丁字路になっています。この丁字路の西北角にあるのが、干菓子・半生菓子の名店『亀末廣（かめすえひろ）』（姉小路通車屋町東入ル車屋町）。文化元年（一八〇四年）創業。その看板「御菓子司亀末廣」は、看板の四周に使用済みの干菓子の木型をあしらったもので、老舗が並ぶ姉小路通の中でも一際目を引きます。

『亀末廣』は、予約制の店頭販売のみ。「京のよすが」は、四畳半に区切った秋田杉の箱に、干菓子や半生菓子などを詰め合わせたもの。「京の十二月」は、毎月にテーマ（例えば一月は「御所」、二月は「稲荷」など）を決めて干菓子を詰め合わせたもの。和菓子おたくには、たまらない意匠です。

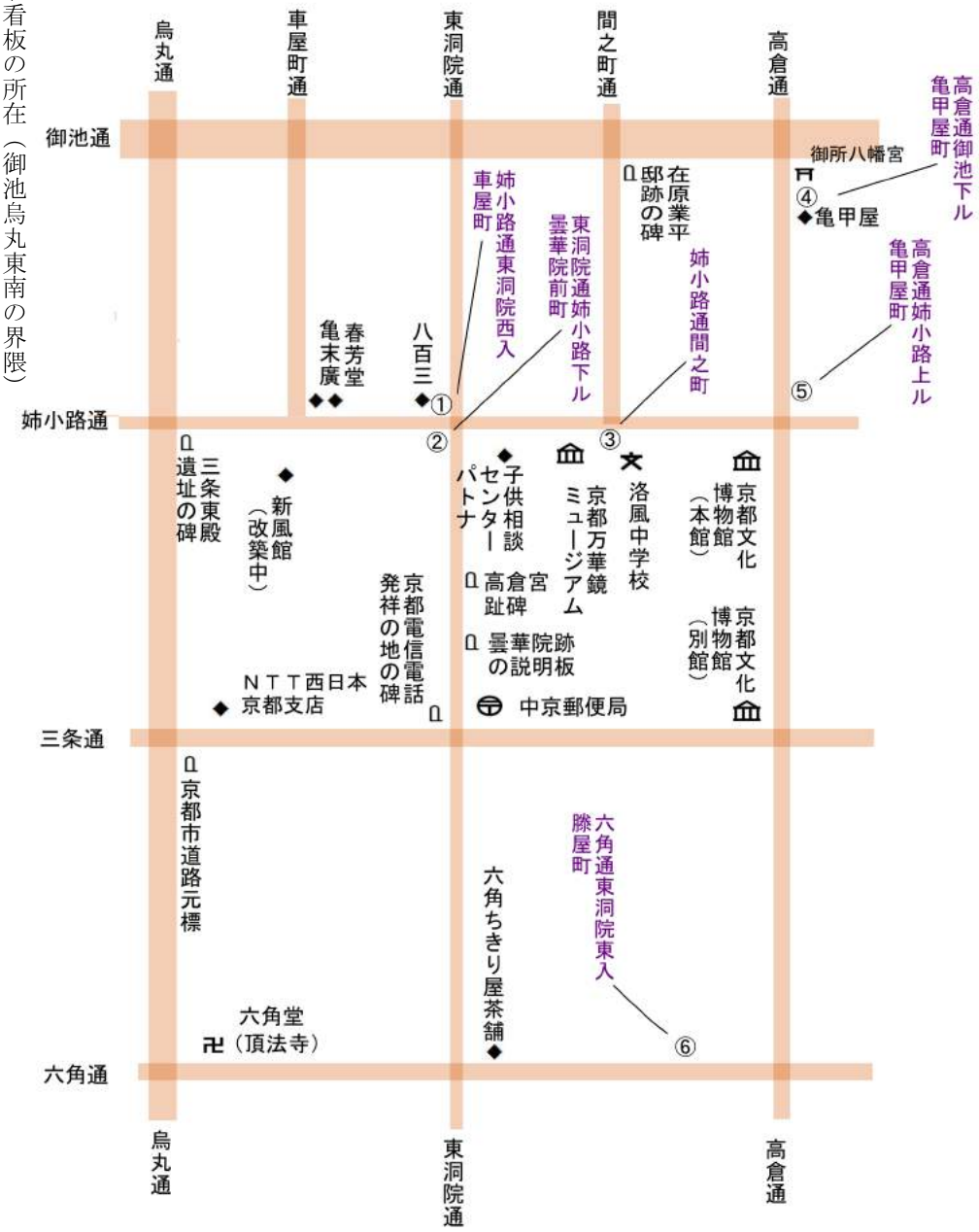
■　表具店春芳堂

『亀末廣』の西隣に、表具店『春芳堂（しゅんぽうどう）』（姉小路通烏丸東入ル車屋町）。創業は安政三年（一八五六年）。インターネット https://www.shinise.ne.jp/j_kyoto/voices/vol/21/21-d.html に情報誌「京都」掲載された、五代目当主伏原佳造氏のコメントが載っています。「表具は本紙（絵や書）という主役を生かすための脇役です」との信条のもとに、その表具の使われ方、依頼者の意向を聞きとり、作品の流派、時代や材質を理解して、それに最も相応しい形式、材料、寸法、紋様、色彩を考えて、本紙を十分に生かす方策を考えるのが、表具師の仕事。そのコメントの中で、「表具にとって憂うべきことは、日本人の季節感への繊細な感覚が欠如しつつあることです。日本特有の空間・床の間に、季節に応じて掛け軸を掛け替えるような習慣が、ともすれば失われつつあるのではないか…。」との危惧が表明されています。店の表の看板は、竹内栖鳳によるもの。

■　柚味噌の八百三

さらに、姉小路を東に進むと、姉小路東洞院の交差点の西北角に、柚味噌（ゆずみそ）『八百三（やおさん）』（姉小路通東洞院西入ル車屋町）があります。『八百三』は、宝永五年（一七〇八年）創業で　三〇〇年あ

町名看板の所在（御池烏丸東南の界隈）



御菓子司亀末廣

まりの歴史をもつ老舗。柚子の香りを閉じこめた味噌を製造販売しています。

■　車屋町は姉小路通の両側町

南北の通りの「車屋町通り」と町名の「車屋町」の区別がややこしい。京都の町割りが両側町を原則にしていることを思い出してください。「車屋町通り」は、烏丸通りの東側を南北に走る通りの名称で、「車屋町」は、姉小路通の両側町の名称です。誤解しやすいですが、「車屋町」は、「車屋町通り」の両側町ではありません。

姉小路通東洞院西入（車屋町）①

上で取り上げた老舗の所在地は、基準の四つ辻の表示は異なりますが、町名としては、同じ車屋町です。姉小路東洞院の交差点の西北角の八百三の壁面に、姉小路通に面して、町名看板「姉小路通東洞院西入車屋町」①が掲示されています。保存状態は悪いのですが、写真でも「車屋町」の文字が、比較的はっきりと読めます。スポンサー名は残念ながら読み取れません。車屋町に属する民家が、姉小路通に面して、南側に一軒ありますので、北側の老舗群と併せて、両側町であることが確かめられます。

一方、同じ交差点の西南角には、東洞院通に面して「東洞院姉小路下ル（曇華院前町）」②の町名看板が掲示されています。スポンサー名は不明。保存状態が悪いので、写真ではよく判別できませんが、うっすらと「曇華院前町」の文字が読み取れます。こちらは、東洞院通の両側町が曇華院前町であることを示したもの。

東洞院姉小路下ル（曇華院前町）②

■ 三条東殿の遺跡

烏丸姉小路の東南の一画は、遠く平安時代に三条東殿（さんじょうのひがしどの）があったところ。烏丸姉小路の東南、新風館の姉小路に面した壁面に、「三条東殿遺址」の碑があります。載せた写真は、二〇一二年十月二十八日に撮影したもの。二〇一八年現在は、新風館が改装中のため直接にはみることができません。

この碑のそばに設置された駒札には、次のように記されています。

三條東殿遺址

現在の三條烏丸交差点の東北に位置する方四十丈（約一二〇メートル）の地は、古の三條東殿の遺址にあたっている。

十一世紀の初め、ここには、伊豫守藤原済家の邸宅が

三条東殿遺址の碑

あり、それは子孫の宮内卿藤原家通に傳えられた。崇徳天皇の天治二年（一一二五）白河法皇はこの地を得られ、ここに見事な殿舎を造営し、院の御所とされた。法皇の崩後、鳥羽上皇は三條東殿をやはり院の御所とされ、后の待賢門院と共に住まれ、それは長承元年（一一三二）七月の焼亡時まで続いた。

その後、この地は皇子・後白河法皇の院の御所となった。

平治元年（一一五九）十二月九日の夜、源義朝は軍勢五百余をもって三條東殿を襲撃。ここから法皇を連れさって幽閉し、かくして平治の乱が勃発した。そのとき、武士と火焔にせめたれられた多数の官女が三條東殿の井戸に入って、非業の死をとげたという。

このように三條東殿址は、院政時代における政治的文化的中心地のひとつであり、その点で永く記念されるべき遺跡である。

昭和四十一年二月

財団法人　古代学協会

待賢門院璋子（たけんもんいんたまこ）は、永久六年（一一一八）に養父白川法皇の庇護のもとに、鳥羽天皇の中宮になり、元永二年（一一一九）、第一皇子・顕仁親王（後の第七五代崇徳天皇。在位保安四年［一一二三］ー永治元年［一一四一］）を出産。大治四年（一一二九）に白川北殿（熊野神社前の京都大学熊野寮に白川北殿址の碑あり）にて白川法皇の崩御。後ろ立てを失った待賢門院璋子は、鳥羽上皇の寵愛も、後に入内した美福門院得子に奪われました。美福門院の子が近衛天皇（第七六代。在位永治元年［一一四一］ー久寿二年［一一四二］）として即位。これは、父鳥羽上皇が多分美福門院の意を承けて、崇徳天皇に無理矢理譲位を迫った結果。事情を悟った待賢門院は、翌康治元年（一一四二）、自ら建立した法金剛院（大治五年［一一三〇］）において落飾。その三年後の久安元年（一一四五）、長兄・実行の三条高倉第にて崩御。

当時から、崇徳天皇は、鳥羽上皇と待賢門院璋子の子ではなく、白川法皇と待賢門院璋子の子であるとの噂がありました。鎌倉初期の説話集「古事談（こじだん）」（源顕兼著）第二には、次のような記事があります。

待賢門院は白川院御猶子の儀にて、令二入内一給。其間法皇令二密通一給。人皆知レ之歟。崇徳院は白川院御胤子云々。鳥羽院もその由を知食して、叔父子とぞ令レ申給ひけり。

「叔父子」とは、仮に近衛天皇が白川法皇の子であれば、第七三代堀河天皇（鳥羽上皇の父親）と兄弟ということ、すなわち、鳥羽上皇にとって叔父にあたることを差しています。この記事の真偽はわかりませんが、鳥羽上皇が、崇徳天皇を疎んじていたことは確からしい。実際、第七六代近衛天皇（母は美福門院得子）を二歳で即位（永治元年［一一四一］）させるために、さしたる落ち度もないのに、崇徳天皇を退位させています。

さらに、「鳥羽上皇から冷遇されている」という、崇徳上皇の想いは、第七六代近衛天皇（母は美福門院得子）の夭折（久寿二年［一一五五］）の際の第七七代後白河天皇（母は待賢門院璋子）

の即位（久寿二年［一一五五］）という、変則的な人事によって決定的になったのでしょう。

近衛天皇の即位と夭折によってもたらされた変則人事は、どちらも、美福門院が己の立場を保持するために、臣下を巻き込んで画策したものでしょう。美福門院の鳥羽上皇に対する影響力の大きさが感じ取れます。

かくして、鳥羽上皇の死（保元元年［一一五六］）を契機として「保元の乱」が起こります。実際に敵対したのは、崇徳上皇と後白河天皇ですが、この乱も、「美福門院が、自分の立場を有利にするために、後白河天皇の陣営を支持して、崇徳上皇を葬り去ることを企てた」と考えると、わかりやすい。

鳥羽上皇と崇徳天皇（母は待賢門院）の確執にもかかわらず、鳥羽上皇の待賢門院への感情は、三条高倉第における待賢門院の臨終の際に、「磬を打ち鳴らして大声で泣いた」という行動（『台記（藤原頼長）』の記事）で推し量ることができます。多分、寵愛は側室の藤原得子（美福門院）に移っていたと言っても、五男二女（第一皇子・顕仁親王［後の第七五代崇徳天皇］、第四皇子・雅仁親王［後の第七七代後白河天皇］、統子内親王（後の上西門院など）をなした待賢門院への想いは格別なものであったといえます。

■　待賢門院璋子と上西門院統子のサロン

待賢門院璋子は、女性として魅力のあった人で、周りには多くの才女があつまりました。待賢門院自身の和歌は残っていないようですが、仕えた女房のなかには勅撰和歌集に和歌を残した女性がたくさんいます。その例を次にあげましょう。

■　待賢門院兵衛（上西門院兵衛）

まず、金葉和歌集を調べますと、待賢門院兵衛（上西門院兵衛と同一人物。待賢門院堀川の妹）が掲載されています。なお、上西門院統子は、待賢門院の子で、後白河天皇の姉。三條南殿（本シリーズ第二九回の「院政時代の名残」の項参照）に住みました。母待賢門院の没後、歌にすぐれた女房を多く引き継ぎました。兵衛はその一人。

金葉和歌集には、新院（鳥羽上皇）の歌（金葉和歌集巻第一・春歌・三〇）のあとに、次の歌が収録されています。共通の詞書「白河の花見の御幸に」が予想できますので、補いました。

白河の花見の御幸に　　待賢門院兵衛

万代のためしと見ゆる花の色を
うつしとどめよ白川の水

金葉和歌集巻第一・春歌・三三

なお、保安五年（一一二三）に行われた白河法皇の白河花見の御幸については、『今鏡』上・すべらぎの中・第二・「白河の花の宴」に詳しい記載があります。この花見には、鳥羽上皇（新院）と待賢門院も同行。法勝寺（現在の岡崎の京都市動物園周辺にあった寺院）で桜をめでて、白河殿に移動して、酒宴と歌会が催されことが記されています。そのなかに、鳥羽上皇（新院）の御製が、集（多分金葉和歌集）に入ったことが書かれており、さらに、上記の兵衛の歌が引用されています。

三条高倉第における待賢門院の喪があけた時に、崇徳上皇と上西門院兵衛が贈答した歌を次に引用します。なお、待賢門院の崩御は、久安元年（一一四五）のこと。

待賢門院かくれさせ給ふて後、御いみはててかたがたにかへらせ給ける日　崇徳院御製

かぎりありてひとはかたがた別るとも
涙をだにもとどめてしかな

御返し　上西門院兵衛

ちりぢりに別るるけふのかなしさに
涙しもこそとまらざりけれ

千載和歌集巻第九・哀傷歌・五七八、五七九

ここで、三条高倉第について、覚え書き。三条高倉第は三条大路南、高倉小路東にあった邸宅で、保延四年（一一三八年）頃に待賢門院璋子が、異母兄藤原実行（三条家の祖。三条実行ともいう）から譲られたもの。落飾後、花園に建立した法金剛院と三条高倉第を交互に御所とされていました。なお、雅仁親王（のちの後白河天皇）も三条高倉第に一緒に住んでいました。待賢門院は、最晩年に病を得て、法金剛院から、三条高倉第に移られて、ここで久安元年（一一四五年）に崩御。待賢門院の臨終に際して、鳥羽法皇や女房たちが、みな号泣したことは、すでに述べました。

上西門院兵衛と姉である待賢門院堀川の歌が千載和歌集第一春歌に連続して掲載されていますので、本シリーズ第二九回の「院政時代の名残」の項に引用してあります。さらには、恋歌のところにも、姉妹の歌が連続して掲載されています。久安百首は、久安六年（一一五〇）に崇徳上皇に奏覧されたもの。

百首の歌奉りける時、恋の歌とてよめる　待賢門院堀川

あら磯の岩にくだくる浪なれや
つれなき人にかくる心は

岩ま行山下水をせきわびて　上西門院兵衛
もらすこころのほどをしらなん

千載和歌集巻第十一・恋歌一・六五二、六五三

■　待賢門院中納言

待賢門院に局の一人に、待賢門院中納言がおり、彼女の歌は、金葉集に掲載されています。金葉集所載の歌の詠題は、「花契遐年」。遐年とは、長寿のこと。桜の花が長寿を約束するの意。これは、上皇や天皇が出席した歌会には、好んで選ばれた詠題。

新院の御かたにて、花契遐年といへることをよめる　待賢門院中納言

しら雲にまがふさくらの梢にて
千とせの春を空に知哉

金葉和歌集巻第一・春歌・四十

待賢門院中納言は、待賢門院の没後、小倉の山の麓に隠棲しました。

鎌倉時代に成立した『撰集抄』は、西行法師の諸国行脚を記し

た説話集（作者不詳）ですが、そのなかに、西行と待賢門院中納言の局が対面したことが記されています。

中納言局発心

待賢門院に、中納言の局と云ふ女房をはしましき。女院におくれまいらせて後、さまをかへ、小倉の山の麓におこなひすましておはし侍りき。（中略）

此局のわすられけん、けに此世一の宿善をうへ給へるか、聊の縁によりて、おい出ぬる成へし。我はつたなしといゑ共、世をそむく事も、彼局よりは遥のさき也。又都名利をおもはす、偏仏の道にとこそ思ひ侍れ共、はや、彼局の心はせにもおとり侍りぬるはつかしさよと思ひ、帰る道すから、又案するやうは、はつかしさ思ふこそ、憂喜の忘れぬなれと思ひとりぬ。帰て心をたつれは、さては又いかゝせむと思ひかねて、小倉山を出侍り。

又其後、三とせ経て後、此局おもく煩ふよし承り侍りしかは、訪も聞えんとて罷たりしかは、はやいき終にけり。西に向き掌を合わせ、威儀を乱さずして終にけり。憂喜の心に忘れたりと侍りしは、実にて侍りけりと思定て、泣く泣くかへりにき。

『撰集抄』（松平文庫）巻五第六　中納言局発心
http://goo.gl/0LVKD

（意訳）

待賢門院に、中納言の局という女房がいらっしゃった。待賢門院が亡くなったのち、出家して、小倉山の麓に隠遁しておられました。（中略）

待賢門院中納言の局が、過去の憂いも喜びも忘れてしまったのは、悟りの境地に達したものでしょう。私西行は頼りないといっても、局よりもずっと以前に出家しています。また、都の名利を追わず、ほとけの道をひたすらにたどってきましたが、もはや、局の現在の境地には劣っていることの恥ずかしさに思い至りました。帰るみちすがら、この恥ずかしさを反芻すれば、忘れてしまえるのではないかとおもいました。帰って発心すれば、なんとかなるのかなどと思いながら、小倉山の局のもとを去りました。

その後、三年過ぎたころ、この局が重病になったと聞いたので、お見舞に訪ねたところ、すでにお亡くなりになっていました。西の浄土の手を合わせて、威儀正しくお亡くなりになっていました。憂いも喜びも忘れてしまったということは本当だったと納得して、泣く泣く帰ってきました。

西行の山家集には、嵐山のちかくの小倉山に隠棲していた中納言の局に贈った歌が掲載されています。

待賢門院中納言の局　よをそむき小倉山のふもとにすまれけるころ、まかりたりけるに、事柄まことに幽にあはれなりけり、風のけしきさへことにかなしかりけれは、かきつけける

山おろす嵐の音のはげしさを

何時ならひける君がすみかぞ

山家集（西行）巻中：雑・七四六

国際日本文化研究センターデータベース

lapis.nichibun.ac.jp/waka/waka_i133.html

■　待賢門院堀川

待賢門院堀川の歌は、本シリーズ第二九回の「院政時代の名残」の項に、百人一首所載（もとは千載和歌集第十三恋歌所載）の歌を引用しました。千載和歌集には、この歌とともに、上西門院兵衛と待賢門院安芸の歌も連続して掲載されていますので、併せて引用しておきましょう。

百首歌奉りける時、恋の心をよめる　待賢門院ほりかは

ながからむ心も知らず黒髪の

みだれてけさはものをこそ思へ

よひのまも待に心やなぐさむと

いまこむとだに頼めをかなん　上西門院兵衛

そなれ木のそなれそなれてむす苔の

まほならずともあひみてしかな　待賢門院のあき

千載和歌集巻十三恋歌三・八〇二、八〇三、八〇四

「磯馴木」とは、地に傾きはえた木のこと。この連続する三首は、待賢門院璋子・上西門院統子のもとに集った女房たちの豪華さを示しています。「百首歌たてまつりけるとき」を崇徳上皇に奏覧された久安百首とすると、久安六年（一一五〇）。すでに、待賢門院は崩御しています（久安元年［一一四五］）。

次に引用するのは、詞花和歌集所載の和歌二首。

題しらず　待賢門院堀川

こやのいけにおふるあやめの長きねは

ひく白糸の心ちこそすれ

詞花和歌集巻第二・夏・六三

だいしらず　待賢門院堀川

あだ人はしぐるる夜半の月なれや

すむとてえこそたのむまじけれ

詞花和歌集巻第九・雑上・三一四

次の二首は、千載和歌集所載のもの。「百首歌たてまつりけるとき」とは、久安六年（一一五〇）に、崇徳上皇に奏覧された久安百首のこと。

百首歌たてまつりけるとき、初春の心をよめる　待賢門院堀川

雪ふかき岩のかけ道跡たゆる

吉野のさとも春はきにけり

千載和歌集巻第一・春歌上・三

百首歌たてまつりけるとき、子日の心をよめる　待賢門院堀川

ときはなる松もや春をしりぬらむ

はつねをいはふ人にひかれて

千載和歌集巻第一・春歌上・十二

「子日」は、子にあたる日で、特に、正月の最初の子の日。これを「初子」といいました。この日に、野に出て小松（子日の松）

を引き抜き、若葉を摘んで遊び、宴を設けた行事を、「子日の遊び」といいました。

千載和歌集巻第一・春歌上・四一には、「百首歌めしけるとき、春の歌とてよませ給ふける」という詞書とともに崇徳上皇の歌が掲載されています。すぐ次に掲載されている待賢門院堀川の歌には詞書がありませんが、「百首歌たてまつりけるとき、春の歌とてよめる」とでも、書くところでしょう。そのように補っておきました

百首歌たてまつりけるとき、春の歌とてよめる　待賢門院堀川

いづかたに花咲ぬらむとおもふより
よもの山辺に散心かな

千載和歌集巻第一・春歌上・四二

百首の歌奉りける時、秋立心をよめる　待賢門院堀川

秋のくるけしきの森の下風に
立そふ物はあはれなりけり

千載和歌集巻第四・秋歌上・二二八

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる　待賢門院堀川

はかなさを我身の上によそふれば
袂にかかる秋のゆふ露

千載和歌集巻第四・秋歌上・二六四

百首の歌奉りける時よめる　待賢門院堀川

さらぬだにゆふべさびしき山ざとの
霧の籬に牡鹿なくなり

千載和歌集巻第五・秋歌下・三一一

■ 待賢門院安芸

待賢門院安芸（郁芳門院安藝）は、もともと白河院皇女郁芳門院（堀河天皇准母）に仕えましたが、のちに、鳥羽院后待賢門院璋子に出仕しました。晩年には崇徳院主催の久安百首の作者に列しました。

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる　待賢門院安芸

五月雨はあまのもしほ木朽にけり
浦べに煙たえてほど経ぬ

千載和歌集巻第三・夏歌・一八五

千載和歌集の羈旅歌のところに、崇徳上皇の歌のあとに待賢門院堀川と待賢門院安芸の歌が連続して掲載されています。詞書は、崇徳上皇のものを改変して載せました。

百首の歌奉りける時、旅の歌とてよめる　待賢門院堀川

道すがら心も空に詠やる
都の山の雲がくれぬる

同院安芸

ささの葉をゆふ露ながら折しけば
玉散旅の草枕かな

千載和歌集巻第八・羈旅歌・五一三、五一四

「詠やる」の読みを、「ながめやる」としましたが、自信はありません。

■　待賢門院加賀

待賢門院加賀の次の歌は千載和歌集収録されていますが、花園左大臣（源有仁）にまつわる有名な逸話が、『十訓抄』に残されてされています。

花園左大臣につかわしける　　待賢門院加賀

かねてよりおもひしことぞふし柴の
こるばかりなる歎きせんとは

千載和歌集巻第十三・恋歌三・七九九

なにごとも世に出ようとするとき、その道の先達（ここでは、花園左大臣源有仁）に遠慮せずに売り込むことの大切さを説いています。この逸話は有名になって、「伏し柴の加賀」と称されるようになりました。

■　旧京都中央電話局と新風館

「京都電信電話発祥の地」の石標が、三条通東洞院北西角に設置されています。碑文には、「明治五年（一八七二）西京電信局、明治三十年（一八九七）京都電話交換局、この地に建つ」と記されています。写真に示すように、この石標には、京都電話百年記念タイムカプセル「Tokiよ翔べ」の石標が併置されています。これらの石標のあるところから東北の一画は、西京電話局・京都電話交換局の跡で、京都における電信電話発祥地です。三条通に面したところに、現在もＮＴＴの巨大な建物が建っています。

烏丸姉小路の東南角の一画は、旧京都中央電話局が建っています。昭和初期の建築で、昭和五十八年（一九八三）、京都市登録有形文化財に登録されたもの。平成十三年（二〇〇一）に改装されて、「新風館」の名称で、洒落た複合商業施設として親しまれてきましたが、平成二十八年（二〇一六）に閉館。現在は、ホテルと一体化した施設として再開発がおこなわれています。改装前の新風館をしのぶよすがとして、二〇一二年十月二十八日に撮影した写真をのせます。

「京都電信電話発祥の地」の石標

二〇一二年当時（改装前）の新風館内部

■ 京都市道路元標

三条通烏丸の東南角（京都銀行前）の歩道に、「京都市道路元標」が建っています。碑文は西の面に刻印されています。大正九年（一九二〇）年に施行された旧道路法と同法の施行令にもとづいて建てられたもので、ここが当時の京都市の中心と考えられた箇所であることを示しています。大正九年（一九二〇）年三月三〇日付京都府告示第一五〇号に府下の道路元標の位置が列挙されていて、京都市道路元標の位置は「下京区三条通烏丸通交叉点」と記されています。したがって、もともと三条大橋付近にあって、ここに移されたというのは、俗説であることがわかります。

「京都市道路元標」の石柱の上部と下部は色が違っており、長く下部が地中に埋まっていたことを示しています。「京」の表記が、旧字体の「京」となっているところも時代を感じさせます。

京都市道路元標

中京郵便局（三条東洞院交差点から東北をのぞむ）

■　中京郵便局

三条東洞院の東北の一角に、赤レンガ造りの中京郵便局があります。一八〇二年（明治三十五年）に建設されたネオルネサンス様式で、京都市登録有形文化財であり「景観重要建築物」として指定もされています。一九七三年（昭和四十八年）に外観を残したままで、内部を新築するという方法で保存されています。

■　曇華院・高倉宮

中京郵便局の東洞院通に面した壁面に、内部の新築の際におこなわれた発掘調査に関する説明板「平安京東洞院大路・曇華院の説明板」が掲示してあります。

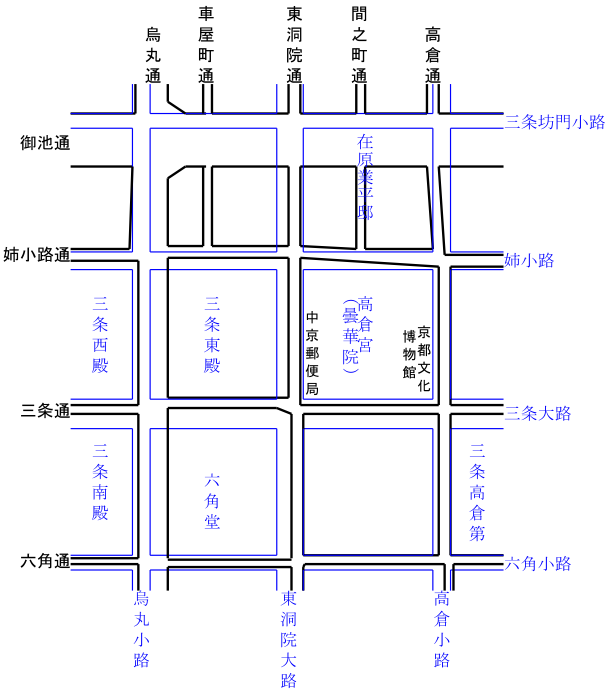
その説明板の左上部分に載せられた「平安京坊条配置図」をもとに、製図したものを示しておきます。この図から、現在のこの付近の街並が、平安京の坊条の面影をとどめていることがわかります。

東洞院通（旧東洞院大路）の両側町（北は姉小路通（旧姉小路）、南は三条通上る）を、「曇華院前町（どんげいんまえちょう）」といいます。東側に曇華院があったところですが、曇華院そのものは、明治四年（一八七一）に嵯峨に移転しています。

この場所は、後白河天皇の第三皇子の以仁王（もちひとおう）（仁平元年―治承四年［一一五一―一一八〇］）の御所「高倉宮（たかくらのみや）」があったところ。東洞院通姉小路下ル東側（こども相談センターパトナ前）に「高倉宮趾碑」があります。

以仁王は、この高倉宮（三条高倉邸）で、治承四年（一一八〇年）四月九日、源頼政と謀って、平氏追討の令旨を下しました。保元の乱、平治の乱を経て平清盛の横暴が極まったことに対抗するためです。しかし、この令旨は事前に漏れてしまいます。平氏は、以仁王を臣籍降下させ、「源以光」と改めた上で、土佐国への配流を決定しました。以仁王を拘束するために三条高倉邸に向かった検非違使別当・平時忠の兵の動きを察知して、以仁王は、女装して邸を脱出し、園城寺に逃れました。源頼政は、園城寺

平安京東洞院大路・曇華院の説明板



「平安京坊条配置図」（曇華院の旧地）

にて以仁王に合流しました。ここも危険になったため、さらに南都興福寺を目差しました。この途上、夜間の行軍に疲れた以仁王は、宇治平等院で休息を取ることになり、やむなく宇治橋の橋板を外して防衛線としました。宇治川を挟んだ攻防が、平家物語の一つのエポックである「橋合戦」です。防衛線は破られて、平等院での源頼政の奮戦と切腹。平等院を逃れた以仁王も結局は山城国相楽郡光明山鳥居の前で落馬したところを討ち取られます。

以仁王と頼政の反乱は結局のところ失敗でしたが、以仁王の令

高倉宮趾碑

旨を奉じた源頼朝、源義仲、さらには、甲斐源氏、近江源氏などが各地で蜂起し、鎌倉時代への幕開けとなります。

■　初音中学校の廃校

この一画（中京郵便局の北隣り。姉小路東洞院交差点の東南）には、平成五年（一九九三）まで、初音中学校がありました。初音中学校の前身は、明治時代の第二十六番組小学校まで遡ります。「高倉宮趾碑」の写真でわかるように、そのそばに、「明治天皇行幸所上京第廿九組小学校」の碑が残っています。

この地域は、明治二年（一八六九）に、上京第二十六番組となり、国の補助を受けずに第二十六番組小学校を設立。明治五年（一八七二）の上京第二十九区への改組を経て、明治十二年（一八七九）に上京第二十九番組に改称されています。第廿六組小学校（第廿九組小学校）は、明治八年（一八七五）に初音小学校と呼ばれるようになっています。明治天皇（一八五二―一九一二）の関西行幸は、明治十年（一八七七）におこなわれたのですが、これらの事情を考慮して、「明治天皇行幸所上京第廿九組小学校」の碑の建立時（昭和十四年［一九三九］）に、碑文では第廿九組小学校としたのでしょう。初音小学校は、太平洋大戦後は初音中学校となりましたが、平成五年（一九九三）に閉校し、柳池中学校（現京都御池中学校）に統合されました。

■　子ども相談センターパトナ

初音中学校の跡地は、現在は京都市教育相談総合センター（子ども相談センターパトナ）となっています。姉小路東洞院の交差点の東南角に、「初音の庭」の説明盤が埋め込まれています。子ども相談センターパトナの正門（姉小路に面している）を入ったところにある小庭園で、水琴窟を備えています。

写真を載せた「高倉宮趾碑」の南側に「翔びたとう初音　記念碑」（平成十八年［二〇〇六］）が設置されています。これは、初音中学校が閉校した際（平成五年［一九九三］）の記念事業の

キャッチフレーズを表題にしたもの。碑文では、「校名の「初音」は、曇華院境内の「初音の杜」に由来する」など、この地域の歴史が簡潔にまとめられています。

子ども相談センターパトナ（平成十五年［二〇〇三］開所）は、子どものなやみや親の気がかりを受け止める「教育相談（カウンセリング）」と「生徒指導」部門を集約するとともに、不登校の子どもたちの活動の場である教育支援センター（適応指導教室）を一体化した全国初の施設。

■ 京都万華鏡ミュージアム、洛風中学校

子ども相談センターパトナに併設されている京都万華鏡ミュージアムと洛風中学校は、姉小路通沿いの一続きの建物にはいっており、外観から察するに、旧初音中学校の校舎を改装したもの。

京都万華鏡ミュージアムは、国内外の作家作品、約三〇〇点の所蔵品コレクションを有しており、万華鏡に関するお楽しみスポット。コレクションの中から季節ごとにテーマを設け、常時約五〇点を展示しています。展示中の万華鏡はすべて直接手に取り自由に覗くことができます。万華鏡の手作り教室が随時おこなわれています。館内のフロアはカフェテリアスペースとなっており喫茶、食事を楽しむことができます。

洛風中学校（姉小路通東洞院東入曇華院前町七〇六ー三）は、京都万華鏡ミュージアムの建物と一続きです。掲載した洛風中学校の門標の写真は、間之町通を南下して、姉小路通に突き当たったところを撮ったもの。

京都万華鏡ミュージアム　洛風中学校の門標

洛風中学校は、平成十六年（二〇〇四）に、全国三番目に開校した不登校特例校です。そのため、授業時間数は少なく、一年あたり七七〇時間。また、「科学の時間」「創造工房」など、独自の授業を実施しています。

洛風中学校の門標の脇に掲示してある町名看板「姉小路通間之町」③のスポンサーはライオンズクラブ。下部に案内図をつけた町名看板は、情報量は豊富。ただし、町名が付記されていません。町名は、仁丹の町名表示風に書くと、「姉小路通間之町　曇華院前町」。ただし、間之町通を突き当たった丁字路の場所なので、「東入ル」「西入ル」は、指定しようがありませんね。

姉小路通間之町③

■　京都文化博物館

姉小路通沿いの洛風中学校の東隣には、京都文化博物館の本館が建っています。写真は、姉小路高倉から西南方向の外観を示します。建物は高倉通に沿って細長く続いています。

京都文化博物館の本館の一階には、ミュージアムショップがあり、江戸時代末期の京の町家の町並みを再現した「ろうじ店舗」が開設しています。「ろうじ」とは、「路地」を京風に読んだもの。レトロな雰囲気の通路（路地）の両側で、京の伝統工芸品・名産品の店舗、食事処などが営業しています。おすすめは、手打ちそば・蕎麦料理「有喜屋」。

本館の二階と三階が、総合展示室になっており、テーマを決めて展示が行われています。また三階には、一七〇席のフィルムシアターがあり、京都府が所蔵する古典・名作映画を中心に、様々な特集企画で映画が上映されれています。四階は、特別展示室で、年間を通じて特別展を開催しています。特別展などの情報は、京都文化博物館のホームページ　http://www.bunpaku.or.jp/ から得ることができます。ちなみに、二〇一九年二月二十三日（土）から四月十四日（日）には、「北野天満宮　信仰と名宝　―天神さんの源流―」が開催されています。五階・六階は、ミュージアムギャラリー（貸展示室）になっています。

京都文化博物館（本館）姉小路高倉

本館の南隣に、赤煉瓦造りの京都文化博物館（別館）が建っています。写真は、三条高倉の交差点から西北方向を向いて撮影したもの。この写真の右奥には、高倉通に沿って本館の建物が写っています。この別館は、旧日本銀行京都支店（重要文化財）であり、外観を残して、内部を改造しています。もともと財団法人古代学協会の平安博物館でしたが、京都文化博物館を創設するにあたり、財団法人古代学協会から京都府に寄贈されたものです。別館一階は、ホール、店舗（ギャラリー・ショップ）として使用さ

京都文化博物館（別館）三条高倉

れており、ホールでは、展覧会や音楽会などが開催されます。また、旧金庫棟では、コーヒーショップ「前田珈琲 文博店」が営業しています。旧金庫棟ですから、窓のない閉空間です。入り口は、旧日本銀行京都支店金庫室の重厚な扉。ちょっと変わった雰囲気です。

■ 在原業平邸址

間之町通御池の吉忠ビルの西側、間之町通に面した壁面に、「在原業平邸址」の碑が建っています。建立年は、一九七二年で、建立者は、平安博物館（京都文化会館別館の前身）。

在原業平（八二五ー八八〇）は、平安初期の代表的歌人で六歌仙の一人。『伊勢物語』の主人公に目されています。

「在原業平邸址」の碑

次の古今和歌集所載の歌は、伊勢物語第九段『東下り』にも同じ場面設定のもとに、採用されています。

東のかたへ友とする人ひとりふたり誘なひていきけり、三河国八橋といふ所にいたれりけるに、その川のほとりに杜若といとおもしろく咲りけるをみて、木の陰におりゐて杜若といふ五文字を句の頭にすへて旅の心をよまんとしてよめる　在原業平朝臣

かきつばた
ら衣き
はつつなれにしつましあれば
るばるきぬる旅をしぞおもふ

古今和歌集巻第九・羈旅歌・四一〇

念のため、句の頭の文字に傍点を付しておきました。さらに、古今和歌集には、在原業平の歌が、多く収録されています。その内のいくつかを引用しておきましょう。

なぎさの院にてさくらを見てよめる　在原業平朝臣

よの中にたえて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

古今和歌集巻第一・春歌上・五三

この歌は、伊勢物語の八十二段『渚の院』に採用されていて、惟喬親王（これたかしんのう）の『渚の院』（水無瀬にあったされる別荘）で「馬頭なりける人」が詠んだとされています。これは、在原業平が貞観七年（八六五年）に右馬頭（うまのかみ）に補されたことを踏まえたものでしょう。

ほりかわのおほいまうちぎみの四十賀（よそぢのが）、九条のいえにてし

ける時によめる　　在原業平朝臣

桜花ちりかひくもれおいらくの

こんといふなるみちまがふがに

古今和歌集巻第七・賀歌・三四九

「堀川（ほりかわ）の大臣（おほいまうちぎみ）」とは藤原基経（八三六ー八九一）のことで、その四十賀は貞観十七年（八七五年）です。

さらに、次の古今集所載の歌は、小倉百人一首にも収録されるほど有名です。

なりひらの朝臣

ちはやぶる神代もきかず立田川

から紅に水くくるとは

古今和歌集巻第五・秋歌下・二九四

有名ついでに、この歌は落語「ちはやぶる」にも仕立てられています。柳家小さんの得意ネタです。金さんからこの歌の意味を尋ねられた隠居は、苦し紛れに、「龍田川」は川ではなく、相撲取りの名で、旦那に同行した花見のときに一目惚れした相手が、「千早太夫」。その妹の名が、「神代太夫」。どちらにも振られた「龍田川」の後日談は、落語を聞いてのお楽しみ。

御所八幡

本殿

■　御所八幡宮

御池通と高倉通の交差点の東南隅に、御所八幡宮。御池通（北面）から見た鳥居と、境内の本殿（西面）の写真を載せます。

御池側の鳥居の脇に駒札が掲げてありますので、拡大写真を載せます。この神社はもともと御池堺町の西南角にあったと記載されています。それによれば、太平洋戦争中に御池通を拡幅するための強制疎開のときに、現在の地に移されたと説明

されています。インターネットには、御所八幡のホームページ（gosho8man.com/index.htm）が開設されており、詳しい歴史が記載されています。

このあたりは、室町幕府初代足利尊氏の邸宅（御池通、二条通、高倉通、柳馬場通で囲まれる地域）があったところで、その守護のため、鳳凰山等持寺を建立し、併せて御所八幡宮をを勧請しました。御所八幡の「御所」は、足利尊氏の邸宅（御所）に由来しています。ここから御池通を渡ったところ保事協会館前（京都市中京区御池通高倉上る東側）に「足利尊氏邸・等持寺跡」の石碑が立っています。

由緒ある神社なので、江戸時代の文献にも、いくつか記載があります。『都名所図会』巻之一には、御所八幡社（安永九年〔一七八〇年〕当時）の図が載っています。そのコピーを引用しましょう。

その図中に書き込まれた説明を、次に翻刻引用します。

御所八幡社は、八幡町（一名御池通）高倉の西にあり。足利尊氏公、康永年中に勧請せり。號を鳳凰山等持寺といふ。夢窓国師も暫くここに住ゐひしとぞ。御池と号するは、むかし普光園殿下の亭ありて其の庭に池あり。今両替町御池の北人家の裏に池の旧地少し遺れり。鵲橋は御池通烏丸の西の石橋といふ。古へ此水亭にかかりし橋の旧名なり。

夕立や法華かけ込む阿弥陀堂　其角

『都名所図会』巻之一（安永九年〔一七八〇年〕刊行）

御所八幡 駒札

御所八幡『都名所図会』巻之一（安永九年〔一七八〇年〕）

亀甲屋

康永（こうえい）は、日本の南北朝時代の元号の一つ。北朝方にて使用されたもの。暦応の後、貞和の前。一三四二年から一三四四年まで。この時代の天皇は、北朝方が光明天皇で、南朝方が後村上天皇。室町幕府将軍は初代足利尊氏。

『都名所図会』巻之一では、御所八幡の所在を「八幡町（一名御池通）高倉（たかくら）の西」としていますが、これは駒札の記載と一致しません。

御所八幡宮の南側、高倉通を下がると、中京区高倉通御池下ル（亀甲屋町）東側に、京料理の『亀甲屋（きっこうや）』があります。店内は、京町屋を改装した、落ち着いた雰囲気。豆乳でつくる『引き上げ湯葉』が名物。

その店の北端の壁に、町名看板「高倉通御池下る（亀甲屋町）」

④が貼り付けてあります。スポンサーはロイヤルライオンズクラブ。

さらに、高倉通を下がると、姉小路高倉の東北角の民家（京都文化博物館本館の筋向かいの指物師友齋）の高倉通に面した壁面に、京都ロイヤルライオンズクラブによる町名看板「高倉通姉小路上る（亀甲屋町）」⑤が掲げられています。

この二枚の町名看板は、同じ「亀甲屋町」ですが、基準の四つ角が異なっています。「亀甲屋町」は、高倉通の両側町です。ちなみに、御所八幡宮も「亀甲屋町」の町内で、所在地を略さずに書くと「御池通高倉東入亀甲屋町五九四ー一」。高倉通は、姉小路通と交差するところで、東西にすこしだけずれています。

■　六角堂（頂法寺）

紫雲山頂法寺は、本堂の構造が六角になっていることから、六角堂とよばれています。天台宗で、本尊は如意輪観音。鐘楼は、六角通を隔てた飛び地にあります。西国観音霊場の十八番札所として、如意輪観音の縁日には、多くの参拝者を集めてきました。六角通に沿って、現在でも宿屋が散見されるのは、その名残です。

境内右手奥には、親鸞［承安三年（一一七三）ー弘長二年（一二六二年）］が籠（こも）ったとされる親鸞堂が建っています。親鸞はここで、百日の参籠の結果、救世観音（ぐぜかんのん）の夢告を得たとされます。

高倉通御池下る（亀甲屋町）④

高倉通姉小路上る（亀甲屋町）⑤

六角堂（頂法寺）

救世観音の夢告　　（女犯の夢告）

行者宿報ニ設ケタヒトモ女犯ス
我成テ玉女身ト被レ犯セ
一生之間能ク莊厳シテ
臨終ニ引導シテ生ゼシメン極楽ニ

行者宿報ニシテタトヒ女犯ストモ
我玉女ノ身トナリテ犯セラレン
一生ノ間ヨク莊厳シテ
臨終ニ引導シテ極楽ニ生ゼシメン

（意訳）

行者（修行僧）が、これまでの縁の結果、女を犯すのであれば、私（救世観音）が、玉のように美しい女になって、行者に犯されてあげましょう。一生の間、行者を厳かに保って、臨終には引導をわたして極楽に導いてあげましょう。

これによって、妻帯することに対する迷いがなくなりました。他力本願・在家仏教を旨とする浄土真宗の始まりです。詳しくは、真宗史学研究所（www.jodoshinshu.org/biography/95.html）の解説をご覧ください。

六角堂の執行（住職）の住居は、本堂の後方にあり、池坊とよばれています。華道家元として著名で、六角堂の西の烏丸通に面した建物が池坊会館として、華道の本拠となっています。

京都ロイヤルライオンズクラブによる町名看板「東洞院東入ル滕屋町」⑥が、東洞院通の北側の民家に掲げられています。「滕屋町」は、六角通りの南北を占める両側町で、京都の地名の中でも極めて難読の部類に属しています。濁らずに滕と読むこともあります。難字をさけて「千切」と書くこともあります。

滕とは、織機の経糸をかける丸い芯棒の横にある四角い道具のことです。小学館「日本国語大辞典」の「ちきり」（滕・千切）の項から、挿絵を引用しておきましょう。

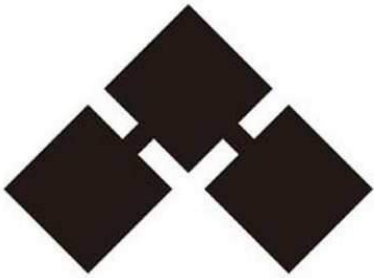
ちきり紋の文様は、ちきりを二つ組み合わせたもの。高倉通三条下ル（丸屋町）の西側に、呉服商千切屋がありますが、その暖簾の文様が滕です。また、六角通東洞院東入ル（三文字町）の北側に「六角ちきりや茶舗」がありますが、その暖簾の文様が、滕

六角通東洞院東入ル（滕屋町）⑥

ちきり（滕・千切）
（小学館「日本国語大辞典」第二版第八巻、［二〇〇一］）

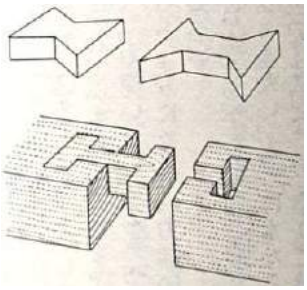
をデザインしたものです。正確にはちきり紋の正方形の四隅をけずって八角形としたもの。文様としては、「隅切り滕」という名称で呼ばれるようです。変形の仕方がおもしろいので、「六角ちきりや茶舗」のホームページから画像を引用しておきましょう。ただ、「六角ちきりや茶舗」の所在地は三文字町で、滕屋町ではありませんが。

木工の分野で、二枚の板を継ぎ合わせるときに使われる技法と



ちきり紋の文様

六角ちきりや茶舗の紋章



ちきり締め（滕締・千切締）
（小学館「日本国語大辞典」第二版第八巻、［二〇〇一］）

して、ちきり締め（滕締・千切締）というのがあります。伝統的な方法ですが、ちきりの部分がアクセントになって、審美的にもすばらしい仕上がりになります。二枚の板を滕（ちぎり）で結ぶことは、男女の仲を結んだり、愛を交わしたりする「契り」に掛けて使われることもあります。

筆者は、福岡県の出身ですが、計量器を商う親戚があり、「ちきりや」と呼んでいました。それで、「ちきり」を、計量器を指す、北九州地方の方言だと、長い間勘違いしていました。ちきり（ちぎり［秤］）とは、竿秤（さおばかり）のことで、竿に持ち手がつけてあり、片方に荷をぶら下げるカギ型の金具、もう一方は目盛りがついており分銅をぶら下げるようになったもの。終戦直後には、普通に見かけたものでしたが、最近は、すっかり見なくなってしまいましたね。その頃は、目盛りにふってあった重さの単位も「匁（もんめ）」でした。思い出してみると、家庭で牛肉を買う場合は、一回につき一〇〇匁（約四〇〇グラム）。

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。この間の仕事は、二〇〇四年に、モノグラフ「Organic Chemistry of Photography」（587ページ）をドイツのSpringer社から出版。数理化学的方面の仕事は、一九九一年に、モノグラフ「Symmetry and Combinatorial Enumeration in Chemistry」（368ページ）をドイツのSpringer社から出版。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。それまでの数理立体化学に関する仕事の集大成として、二〇一三年に、モノグラフ「Combinatorial Enumeration of Graphs, Three-Dimensional Structures, and Chemical Compounds」（576ページ）をセルビアのKragujevac大学出版局（Mathematical Chemistry Monographsシリーズ第15巻）より出版。さらに二〇一五年に、モノグラフ「Mathematical Stereochemistry」（437ページ）をドイツのDeGruyter社から出版。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第31回）　2019/4/30
© 2007, 2008, 2010, 2017, 2019　藤田眞作
http://xymtex.com